

尿から分離された IMP-1 産生 *Providencia stuartii* の 1 症例

◎宇井 孝爾¹⁾、平野 絵美¹⁾、李 相太¹⁾、小泉 章¹⁾、間本 佳予子¹⁾、薮内 博史¹⁾、田中 忍¹⁾
奈良県立医科大学附属病院¹⁾

【はじめに】カルバペネム耐性腸内細菌科はカルバペネムなど広域なβ-ラクタム系薬に耐性を示すことから感染症治療の観点からも問題視されている。我々はこれまで報告例のないIMP-1を産生する*Providencia stuartii*を分離したため、その性状解析を行った。

【症例】直腸癌術後に多発性肝転移をきたした70歳代、男性。入院1週間前から38℃代の発熱を認め、改善がみられず当院を受診。入院時のCT検査で肝転移巣の増加および増大を認め、腫瘍熱も疑われたが、長期に尿道カテーテルが留置されていたことから尿路感染症を疑い、尿培養および血液培養2セットが採取された。抗菌薬はCTRX (2g/day)が入院後直ちに開始され、入院第4病日に解熱したため、LVFX (500mg/day)内服に変更された。入院第20病日に軽快し、退院となった。

【細菌学的検査】

尿検体から分離された*P. stuartii*をNR2165とし、以下の検討を行った。1)薬剤感受性はCLSI法に準拠した寒天平板希釈法で測定した。2)カルバペネマーゼ産生性はCarbapenem

Inactivation Method (CIM)により確認した。3)耐性遺伝子の型別はPCRとDNAシーケンシングにより決定した。

4)耐性プラスミドの伝達能は大腸菌J53を受容菌とした接合伝達実験で検討した。5)プラスミドの不和合性の型別はPCR法により決定した。

【結果】本菌株はIPM, MEPMともMIC 8μg/mlと耐性であり、第三世代、第四世代セファロsporin系薬にも耐性を示した。カルバペネマーゼ産生性試験では、CIM陽性であった。耐性遺伝子はIMP-1, CTX-M-2を保有していることを確認した。接合伝達実験ではプラスミドの伝達性は確認されなかった。また、不和合性型はIncA/Cプラスミドを保有していた。

【考察】IMP-1をコードする耐性因子の伝達性は確認されなかったが、IMP-1産生*P. stuartii*の報告は初めてであり、今後の動向に注意する必要がある。